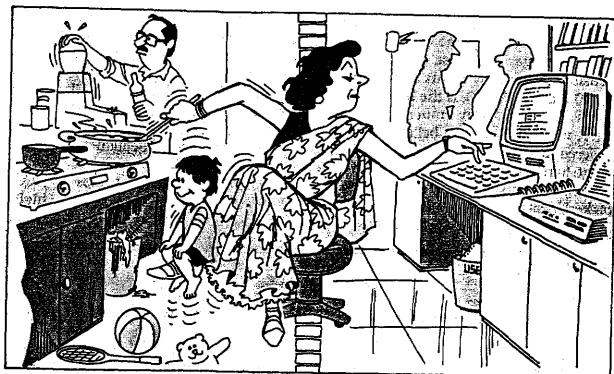


Ⅲ 南 ア ジ ア



仕事も家事も…、多忙なキャリア・ウーマンもサリー姿
(India Today, 1990年11月30日)

サリーの「伝統」

押川 文子

伝統色の強い
インドの衣服

南アジア世界、とくにインドは、世界のなかでも「伝統的」な衣服が日常着としてよく残っている地域のひとつかも知れない。その代表格は女性のサリー姿であろう。サリーは、インド世界という文化的多様性をもつ地域のなかにあつて、全域ではないにしろ過半の地で女性たちがまとう唯一の衣服のかたちとして着られ続けているのである。サリーが、カレー料理とならんでインド文化の象徴、あるいは「悠久」のインド・イメージの欠くべからざる要素と目されるのも理由がないことではない。

ただ、インド社会が衣に対して等しく「伝統的」かという点、そうではない面もある。男性の衣服では、伝統へのこだわりはそれほど強くはない。都市部のみならず農村部でも若い人を中心にシャツやズボンが着用されるようになってきたし（シャツに腰巻き、といった実用的な折衷型も多い）、ハレの最たる場である婚礼の衣服も、花嫁は伝統的な晴姿がどの地域でもしつかり守ら



北インド農村の働くサリー。
バングル売りの行商人 (1983
年、ビハール州で)

れているのに、横に並ぶ花婿は、少なくとも都市部では洋装の方が多し。むしろ家庭でのくつろぎ着として以外に男性が伝統着を着用するときは、そこになにがしかの意味が含まれているようにも見える。

例えば、デリーやボンベイで真つ白な木綿のクルタ・ドーティー(ストンとした長シャツと腰巻)姿の恰幅のよい男性が国産車アンバサダーの後部座席に座っていたら、かなりの確率で彼は(特定の政党の)政治家である。同様に「民衆」出身であることを標榜する政治家を、粗い綿布のクルタとパジャマ(幅広のズボン)やドーティ、裸足にチャップル(インド式革サンダル)といった姿から切り離すことはできない。功なり名遂げた実業家や国民的人気をもつ男優が生成りのタッサー・シルクのクルタ・パジャマに高価なカシミヤ毛のショールを無造作(そう)にまと

っていたら、そこには、心はインド、拝金主義や西欧崇拜には陥っていないという意思表示、あるいはパフォーマンスを見てとるべきだろう。

こうした男性の衣の状況に対して、女性、とくに既



海風にサリーをはためかせて（1970年代初め，マドラス，マリナー・ビーチ，撮影：松谷賢次郎）

婚の女性たちについてみると圧倒的に「伝統的」衣服が主流である。若い女学生の間ではジーンズ姿が定着し、スカート姿もちらほら見かけるようになった今日でも、既婚の成人女性の洋装がさほど珍しくないのは、ゴアやボンベイなど一部の都市くらいであろう。着物と伝統の関連には、性差の問題が深くからんでいるようだ。

もっとも女性の「伝統的」日常着といっても、そのすべてがサリーというわけではない。北部から北西部にかけては、シャルワール・カミーズ（長いブラウス風、もしくはワンピース・ドレス風の上着にゆったりとして足首部分だけ細いズボン、首の回りに前から後ろになびかせる長方形の薄布の三点セット、パンジャービー・スタイルと呼ばれるのはこれである）や、クルタ・チューリダール（長めのブラウスに膝から下がびったりしたバイヤス仕立てのズボン、長方形のマフラー様の布のセット）といった縫製衣のズボン・スタイルも多い。中部から西部インドの乾燥地域ではアップリケや刺繍を施した巨大なスカートと短い胴着、その上から巻く長方形の布という組み合わせもある。ズボン・スタイルは実用性とさまざまデザインが可能だというファッショニ性のせいも、近年若い女性を中心にインド中で見られるようになった。しかしそれとともに、これらサリー以外の女性着の伝統をもつ地域でも、現在ではサリーも併用

されるようになっており、着衣の地域性に相互乗り入れ現象が起きている。ともかくサリーは、インドに加えてバングラデシュやスリランカでも女性の最も一般的な日常着であり、さらに世界中に散らばった南アジア系移民の女性たちの数を加えると……、数はともかくサリーが今日「世界最大」の衣服の形態の一つであることは間違いない。

サリーを着ること
ところで、サリーとは何か。「サリーを着る」とは、どういうことなのだろうか。

今日の一般的なサリーは、幅が一メートル二〇センチ、長さが五、六メートル程度の長方形の非縫製衣で、長スカート様の下着とチョーリーと呼ばれる半袖もしくは袖無し短い胴着とともに着用されている。原則としてサイズはない。サリーは一枚の布だから「着られて」初めて衣服になる。現在最も一般的な着方は、下着の腰紐に布の上端を差し込み一回り半ほど下着の上を巻いた後、前でひだをたたみ、さらにもう一回りさせて右下から左肩にかけて胴着を着用した胸をびったり覆って、最後に残りの布を左肩から後ろへなびかせる。目上の人の前や宗教的儀礼時などでは左肩から頭を覆うように着用して謙讓を示すこともある。こうした着方をすると（理想としては）、下半身はすっきり長スカート風、上半身は美しい胸を強調し、後ろ姿は翻る一メートル余の布端（ここに模様のポイントがおかれる）が優雅なアクセントになって、つまり女性美と貞淑の一般的通念を体現する衣服となるのである。

多様なサリーの歴史

しかし、この今日的なサリーがサリーのすべてではない。サリーが上記のような形態で一般的に定着したのはそれほど古いことではなく、よく見ればサリーは実に多様かつ複雑な側面をもっているのである。

一九六〇年代の半ばに人類学者 N・K・ボースによつて編まれた『インドの農民生活——インドの統一性と多様性に関する研究』はインドのいくつかの地域のサリー、より正確に言えば一枚の布の着方を採録しているが、それらは前述の今日風サリーとは著しく異なる。例えば足の間に布を通して後ろから見るとズボンのように見える着方は南西部では珍しくなかったし、西インドでは布端を左肩から背中側へなびかせるのではなく背中から前にわたす着方の方が一般的だった。今日でも南西部の漁村や港町では、短めに着たサリーの足の間に布を通して威勢よく魚を売っている女性を見かけるし、暫く前までのボンベイのタージ・ホテルのレセプション・ニストの中には布端を前に垂らしている人もいたと記憶している。北インドで出会った貧しい農村女性のサリーは布自体が若干小さく、後ろから頭を覆つて前に回す着方が普通だった。またカーストごとに特有の着方が存在する地域もあった。当然その場合は、下位カースト女性が上位カースト風に着ることとはタブーであり、極端なケースでは胴着の着用や上半身を覆うことを禁じられることもあったという。逆にもともとと小さな布をまもつていた少数民族の女性に対して、キリスト教系宣教師が「道徳的」な格好、つまり上半身を覆う衣服を普及させようとしたこともある。寡婦のサリーには厳しい制約のあったこともよく知られている。一枚の布の着方はさまざままで、多分にそ



肩のデート？新婚さん？若い女性
布端をとめたサリ
学校帰りのサリ（撮影：松谷賢次郎）

それぞれの地域社会の社会規範や身分の構造とも結合していったのである。同じ一枚の布でも「サリ」という一つの衣服ではなかったものであり、そこに込められる女性像も一つではなかった。

もう一つ、布自体の地域性も見逃せない。インド世界では服飾デザインの単調さを補うように、染織文化が豊かな展開を見せた。綾、型染、ろうけつ、絞り、緋、格子、アップリケ、刺繍、とおよそ染織の技法でインド世界にないものはないと言われる。しかもそれぞれの技法が地域特産として発展したのも多く、着ているサリを見ればどの地域の女性かおおよそ見当がついてい

た。それぞれの地域独特の一枚の縫わない布を、それぞれの社会的約束に従って身にまとうこと、これが「サリの伝統」の最大公約数だったといえるかも知れない。

女性の社会進出

とサリ

こうした多様性が
徐々に薄れ、「着
ること」の社会的

意味が急速に変わり始めたのは、十九世紀後半以降のことではないかと私は想像している。

十九世紀半ば、カルカッタなどの植民地都市で女子教育の試みが本格的になった頃、娘たちの学校教育を考え始めた



自転車もさっそうと。お下げ髪の
女学生のサリー

(ブーナ、撮影：松谷賢次郎)

革団体の名をとってブラフモ・サリーと呼ばれ、「地位と名誉」のある層の女性の社会進出にもなつて徐々に広まった。

さらに二十世紀に入ると、民族運動と民族運動への参加によつて開かれた女性の社会進出を契機にサリーはさらに変わっていく。一九二〇年代半ばに全インドレベルの女性運動団体として設立された「全インド女性会議」の各年次大会の写真を見ると、三〇年代半ばを境にサリー姿が現在のそれに近くなる。それ以前は、サリーのまとい方が全体的にゆつたりとしていて、胴着

「進歩的」な上層都市住民の間で衣服をめぐるちょっとした議論が起つたことがある。思春期を過ぎた上位カーストの娘は家のなかで、それも女性だけの区域で過ごすのが一般的だった当時の社会では、不特定多数の男性の眼にさらされる外出を想定した衣服はなく、サリーを一枚まといただけだった。そんな不安定な格好で娘を外に出すわけにはいかなかった。思案のあげく当時のヴィクトリア期イギリスの影響を受けて、高い衿やフリルのついた長袖のブラウスがつけ加えられることになった。こうした改良サリーは当時強い影響力をもっていた宗教・社会改

も長袖やら飾り付やらさまざまである。年次大会記念写真というハレの場にふさわしく、頭部を覆っている女性が多い。三〇年代後半になると、胴着はシンプルな半袖で、サリーを左肩にかけ胸をはった姿が多くなるのである。民族運動の進展のなかで手紡ぎ手織布（カーディー）という新しい布の着用や質素な木綿サリーが好まれたことも、地域色の濃い伝統的サリー以外の衣類をまとう機会を増やしたに違いない。

独立後、工場製の布がさらに普及し、化学繊維や伝統的な技法にこだわらないプリントや織柄が増加したことも当然サリーの標準化を促した。もう一つ忘れてならないのは、素材としての布の供給だけではなく、素材をまとい、特定のイメージを与え、モデルとも憧憬の対象ともなった人々とメディアの存在である。とくに映画の影響は絶大だった。民族運動の女性たちが質素で活動的なサリーを広めたとすれば、庶民が愛したヒロインたちは豊満な女性美を誇示した。胴着はますます体に密着し、着方はますますタイトになる。スターたちのサリーは流行の発信源ともなった。街の仕立屋で「レーカー・キー・タラフ（レーカーみたいにね）」と頼むと、レーカーという大きな瞳が魅力の人気女優好みの胴着を仕立ててくれる、という風に。一九八〇年代に入ると女性観の変化を反映してさらりとした着方が流行ってきた。シャブナ・アズミというインドのスターとしては細身で知的な風貌の女優が着用した胸あきが小さなV型カットで五分袖の胴着や、左肩にきちんとひだをたたむすっきりしたサリー姿が、現代の若い女性たちに支持されているようである。

社会変容を象徴する

サリーの機能変化

サリーは、こうして地域や社会的立場を表す象徴から、女性たちが自らのイメージを託して選ぶ衣服へと徐々に変わりつつあるように見える。もちろん、すべてが急激に変化するということではない。農村部ではまだまだ伝統的な衣服が主流だし、なによりもたった一枚の木綿布を朽ち果てるまで着続ける貧困層の女性にとって問題なのは、何を着るかではなく、着るものがあるか、である。しかし、サリーという一枚の布がインド社会の変容を端的に示していることも事実であろう。それは、一見旧態依然としていて、実は新しい社会の動きに対応しつつ機能を変化させる、という意味で、インド社会の「伝統」と呼ばれる多くの事象、例えばカーストや宗教の変化にも似ている。だからこそ、サリーはけっして古臭い遺物にはならず、女性の心をとらえ続けてきたのではないだろうか。それに、あの実用性ノ立ち上がれないほど食べ過ぎても紐をちよつと緩めれば平気、どんな姿勢でも座れるし、身につけたままでハンカチや財布の代わりにもなる。自転車、バトミントン、テニスくらいならそれなりに可能だし、たとえば場所もとらない。やはりサリーは当然、インド女性の、少なくとも中年女性の代表的日常着であり続けるに違いない。

注* Bose, N.K. (ed.), *Peasant Life in India: A Study in Indian Unity and Diversity: Anthropological Survey in India, 1967* (米倉二郎訳『インドの農民生活』古今書院、一九六九年)

(おしかわ ふみこ／アジア経済研究所地域研究部副主任調査研究員)